

# 日本ハンザキ研究所訪問記

(公財) 科学教育研究会

青木 良、岩田 浩司  
早乙女 薫、栃本 忠良

## ★ 出発

都会住まいの我々には、特別天然記念物・オオサンショウウオを自然状態で目にする機会は全くない。しかし、数年前から京都鴨川のオオサンショウウオについての情報が伝えられ、皆の興味が増していった。今年度、研修会の予定について話し合う中で、ハンザキ研究所が候補に挙がり、産卵期が観察しやすいことから、9月に実施することになった。

9月8日、東京発ひかり467号岡山行きに乗り、姫路で播但線に乗り換え14:55生野着。そこからは予約したバスで生野町・黒川温泉へ向かった。その途中、市川の河岸にハンザキ研究所はあった。

## ★ 観た！ オオサンショウウオ

栃本武良研究所長自ら停留所前迄迎えて頂いたが、それは、日が暮れないうちに実物を見せたいとのご配慮で、研究所前の橋には別のグループ・麻布大学の学生が川を覗いていた。夕暮れではあったが川の中には魚影も見える。しかし、ハンザキは見つからない。学生の声に頼りに目を凝らすと、やっと見えた。今日は朝から3~4匹が出ているとのこと。到着してすぐに観られるとは思ってもしなかった。

橋の下の岩に大きな隙間があり、強い雄が入っていて、別の雄がやって来ると追い払っているようだ。オス同士の闘争というよりはなら

み合いで、弱い方が逃げても追わなかった。しかし、実はこれとは異なる、すごいバトルがあるらしい。一昨日も、左脚の脇を食われる大けがをした雄がいたという。

バトルは運が悪いとどちらかが死ぬ。9月が産卵期だが、9月に首に傷がついた死体を拾うことがあるそうで、最初はだれがこんなことをするのか分からなかったが、水槽で飼育中にそのような現象が起こって、雄同士の争い=バトルの結果だと分かったとのこと。説明の間も、大きなオスが上がってきて、岩の下の穴に入るが、間もなく出て来て下流へ向かって歩いて行った。主<sup>ぬし</sup>のいる穴には、繁殖期になると雌がやってきて産卵し、その後雌が出ていく。



川の水が揺れているので、ピンボケ気味です

穴の主になるのは簡単ではないらしい。奥が深く、陸上部に草が生え、中から湧水がある穴で、占有できる力があることが第一、その穴を

クリーニングし、産卵後は卵とその後孵化した幼生を守り続ける体力が必要だ。だからか、この主は10年間測定しても99cmでまったく成長してなかったという。繁殖に力を使いすぎて、大きくなれない。それだけエネルギーを必要としているということであろう。「もちろん餌の量次第ですが、この主は10年間主を続けている優秀な雄」と補足の言葉があった。

穴の奥行きは3m以上あり、産卵時最大9匹が中に入ったという。最大の雄と、雌にスニーカー（忍び寄る、こそこそする）雄が7匹だ。穴の中は覗けなかったが、川には照明装置と観察用カメラが設置され、24時間所内でモニターしているとのこと。また、年に1度は主を捕獲し、データをとっているそうだ。

川の中の動物の調査には発信機を付けるのが有効であるが、電池が長持ちしないとか。1基3万円もするものが2～3か月で不明になるのでは、資金が持たない。けれども、ここに集まった雌雄が、川のどこが住処なのか、などを追跡するにはよさそうだ。



元小中学校のプールを仕切った飼育場



日陰のオオサンショウウオを上から見学



研究所入り口で川の中のハンザキを観察する

#### ★ 研究所は元小中学校だった

橋を渡ると大きな建物が3棟とプールがあった。そこは旧黒川小中学校跡地で、教室は事

務室や標本等資料室として、野外活動施設の壁には地域の生物の写真が張られ、講堂は説明会場としてたくさんの展示パネルが順序よく置かれ、プールはオオサンショウウオの飼育場として活用されていた。

プールはコンクリートで10区画程度に小分けにされ、中に大きな成体が飼育されている。市川の河川工事があった時に頼んで、区分けとろ過装置をつけてもらったとのこと。ハンザキは2～3個体が1区画に入っていて、水位は30cm位で見やすかった。後で、見学者のためにあらかじめ水位を低くしておいたと伺った。うれしい限りである。

仕切りの中には川で見たのより大きな130cm・20kgのハンザキが飼育されていた。



名札をめくると幼生の隠れ家が見られる

「130 cm になるものはめったにいません。市川には 1600 匹位いますが、1 m を超えるのものは 20 匹しかいません。一番大きくても 120 cm です。150 cm を超える記録もありますが、なかなかそのような大きさになるのはいません」とのことだった。飼育室にあるホルマリン漬けの標本は 130 cm は超える大物、迫力がある。

飼育場は川と多少環境が異なっているが、繁殖期には違いない。しかし、産卵用の穴がない上、個体数が管理されているのでバトルは起こらないらしい。

プールの機械室は整備され、幼生の飼育水槽が並んでいた。エアコン完備で人間より良い生活をしているとか。ここは、冬放っておくと水槽が凍り、夏は 25°C を超えますから、とのこと。アマゴも育つ溪流は 17°C 以下、冷暖房は欠かせない。

水槽には名札がついている。「2016 年生・卵と 0 歳幼生」「2015 年生・1 歳幼生」「2 歳幼生」「3 歳幼生」「4 歳幼生」までが飼育されていた。水槽は一見すると何もいない。砂利が少し敷いてあるだけだ。しかし「1 歳幼生」と書いてある名札を上をめくると、小さな隠れ家に幼生がじっとしていた。幼生は何を食っているのだろう。質問すると、水生昆虫が主とのことだった。

0 歳幼生は黒いが 1 年たつと褐色になる。また、幼生には首に鰓があるが、5 年たつと消える。小型サンショウウオ類の外鰓は数ヶ月で消えるから、大変な違いだ。鰓が消えてしばらくしてからマイクロチップを埋め込んだ後、放流される。

マイクロチップは 11 mm、直径 2 mm のガラスのカプセル。それに 10 桁のバーコードが印刷されていて、注射器の中にセットし、ピストンで押し出して挿入する。左肩と決めてあるので、読み取り機で読むことができる。バーコードの内容は放流年月日。一度埋め込めば、怪我等で取れない限り誰でも読み取ることができる。なぜ、このようなことをするのだろうか？

孵化幼生を飼っていると年に 5 mm しか成長しない。2 年で 1 cm、すると放流時 3 cm だと 150 cm になるには 200 ~ 300 年かかる、というのは机上の計算です。そんなにかかるのかなと思っていたら、サメで 400 年生きたという論文が出たので、オオサンショウウオはどうなのか、300 年は生きてほしい…と。



5 歳幼生：間もなくチップをつけて放流

岡山に 116 歳で死んだ標本があると、大学教授の論文にある。しかし、本当に 116 年追いかけた人はいない。ここ黒川や、岡山の山間地に